“原子力の灯” 待望の再開／九州電力・川内１号が並列

2015/08/17

川内１号が並列。九州電力の中央給電指令所で出力が表示された

◆需給構造、正常化へ

九州電力は14日午前9時、川内原子力発電所1号機（PWR、89万キロワット）を並列し、発電・送電を再開した。2011年12月以来、約3年8カ月ぶりに九州の地に原子力の灯がともった。同社は今後、段階的に出力を上昇させ、各種試験を慎重に進める。8月下旬には100％で定格熱出力一定運転に入り、最終関門となる総合負荷性能検査などを受ける。問題がなければ9月上旬にも営業運転に移る。約2年続いた「原子力ゼロ」の状況は解消。東日本大震災以降、火力に大きく依存してきた日本の需給構造が正常化に向かう。

発電機並列操作を行う中央制御室の様子は、九州電力川内原子力総合事務所（鹿児島県薩摩川内市）内の会議室で報道陣にライブ映像で公開された。

藤原伸彦執行役員・川内原子力発電所長はじめ運転操作を担当する社員ら50人以上が中央制御室に詰める中、午前8時57分、「ただ今から並列操作します」とのアナウンスが所内に流れる。その後、運転操作員が同期検定機のスイッチを入れると、針がゆっくりと時計回りに動き出した。針が12時の位置にくるのが、電圧・周波数が送電線側と発電所側で一致（同期）するタイミングだ。

9時ちょうど、同期のタイミングを捉え、主変遮断器のスイッチを「入」に。「1号機発電機並列しました」と発電課長が宣言した。室内の張りつめた空気を破るように大きな拍手が湧いた。

並列後すぐ、発電出力は4万5千キロワットで安定。9時30分から、毎時約3％ずつ出力を上昇する作業を開始し、午後6時30分に出力30％（約27万キロワット）に達した。